

【研究会抄録】

第16回島根新生児研究会

日 時：平成24年2月12日(日) 午前10時10分より

会 場：ビックハート出雲 白のホール
出雲市今市町994-2

当 番 世 話 人：益田赤十字病院小児科 中島 香苗

1. 当院 NICU におけるリハビリテーションの現況と役割

島根県立中央病院リハビリテーション技術科
野田沙耶香, 祝部 俊成
同 リハビリテーション科
永田 智子
同 新生児科
加藤 文英

【目的】県内唯一の総合周産期母子医療センターである当院は、年間約400症例のハイリスク児を受け入れる。今回、当院 NICU でのリハビリテーション（以下リハ）の現況と役割を検討・報告する。

【対象と方法】2006～2010年のリハ症例を後方視的に調査。

【結果】リハ実施13例、内訳は理学療法（PT）11例、言語聴覚療法（ST）7例、PT・ST 併療5例。リハ開始は生後18日～1730日。出生時体重2066±685g。基礎疾患は低酸素性虚血脳症、脳奇形、多発奇形症候群、染色体異常、脊髄髄膜瘤、脳室内出血、気管支異形成症。PT は発達評価、筋緊張や姿勢調整訓練、人工呼吸器装着中の呼吸リハ、ST は哺乳障害に対する機能評価や嚥下訓練を実施し、退院に向け家族、看護師への伝達や指導を行っていた。

【まとめ】NICU のリハは、スタッフと療法内容やリハ計画を共有して病棟ケアへ個別リハを汎化すること、家族指導を通し母子関係確立への支援、在宅サービスと医療リハとの連携など退院支援の一部も担う。

2. 当院で出生した新生児の生理的体重減少に影響を及ぼすと考えられる因子について

吉野産婦人科医院
吉野 和男, 小田 美江, 諸角 美鈴
金築 晴栄, 河瀬しのぶ, 青山 恵里
古居 幸代, 原 百子

【目的】当院で出生した新生児の生理的体重減少に影響

を及ぼすと考えられる因子について検討する。

【方法】平成23年9月から平成23年12月までに当院で出生した新生児72例を対象として、生理的体重減少率10%以上12例（10%以上群）と10%未満60例（10%未満群）に分類し、分娩所要時間（遷延分娩の率）、出生後24時間の体重減少率、出生後24時間の授乳回数、出生後24時間の排尿・排便回数を比較検討した。

【結果】分娩所要時間（遷延分娩の率）は10%以上群が25.0%、10%未満群が18.3%であり、出生後24時間の体重減少率は10%以上群が-5.2%、10%未満群が-4.3%であり、出生後24時間の授乳回数は10%以上群が9.5回、10%未満群が9.9回であり、出生後24時間の排尿・排便回数10%以上群が5.8回、10%未満群が7.0回であった。以上の項目について有意差は認めなかった。

【考察】今回の検討で分娩所要時間（遷延分娩の率）、出生後24時間の体重減少率及び出生後24時間の授乳回数は10%以上群が比較的良くない結果となり、出生後24時間の排尿・排便回数は10%未満群が多い結果となったが、有意差はなく、今後、他の因子についても検討が必要と思われる。

3. 当院 NICU 入院患者の検討

松江赤十字病院小児科

内田 由里, 和田 啓介, 小池 大輔
平出 智裕, 斎藤 恭子, 小西 恵理
瀬島 齊

2011年1月から12月の1年間に松江赤十字病院 NICU (NICU 6床, GCU 9床) に入院した新生児212例（男女ともに106名）を対象に検討した。一月あたり平均17.6名の入院数で出生場所は院内出生が92%、院外出生が8%だった。新生児搬送例（18名）の紹介元は市内にかぎらず、市外 NICU から急性期後の管理目的での転院が4名あった。在胎週数別では、37週～41週が157名（74%）で、33週未満が19名（8.9%）であった。出生体重別では2500g以上の133名が最大で全体の62.7%を占

め、極低出生体重児は12名(5.6%)であった。疾患の内訳は低出生体重児77名(36%)、呼吸障害50名(23%)、帝王切開症候群25名(11.7%)、新生児黄疸19名(8.9%)、新生児仮死15名(7%)、新生児感染症(疑いを含む)14名(6%)、先天奇形4名(2%)、胎便吸引症候群2名(0.5%)、その他の疾患7名(3%)であった。松江圏域周産期ネットワーク体制が進むとともに、母体搬送患者が増加し、地域周産期医療施設との連携もスムーズとなってきていると感じている。

4. 出生前に口唇裂の告知を受けた両親への介入

益田赤十字病院 4階東病棟

大谷 友美, 梅津 綾, 岡崎 祥子
島田 則子

当院では、出生前に口唇裂を告知した症例は今回が初めてであった。妊娠33週に、超音波診断にて口唇裂と診断され、産科医師より両親に告知された。告知後の健診は助産師外来であり、母親から児が手術する病院の事や、手術の時期について質問があった。しかし、口唇裂という疾患については何も情報を得ていなかった。出生後、口唇口蓋裂と診断され、母親は「イメージしていたよりもひどかった」と言われた。入院中には、転院へ向けて、経管栄養の手技や育児技術習得のため指導を行い、同じ口唇口蓋裂の子を持つ親との面談を行ったり、小児科医と相談し、転院先の病院を両親の意向を聞きながら決定していった。この事例をもとに、告知の時期や、告知後のフォローをいつ・どこで・誰が行うのか等のリストを作成し、適切な時期に介入できる様に活用していくこととした。そして改めて、出生前告知後に各医療従事者が連携し、フォローしていく事の重要性を学んだので報告する。

5. 出生後に診断された致死性染色体異常症に対し外科的治療を行った2例—予後不良児の治療方針決定とファミリーケア—

島根大学医学部小児科新生児集中治療部

柴田 直昭, 長谷川有紀, 山口 清次

症例1は在胎期間37週6日、出生体重1616gで出生した女児。18トリソミーで心室中隔欠損症と動脈管開存症を認めた。症例2は在胎期間38週1日、出生体重1916gで出生した女児。13トリソミーで先天性横隔膜ヘルニアを認めた。2例とも出生前診断はされておらず、出生時の蘇生に反応し、生存の為に外科的治療を必要とした。たとえ予後不良な疾患であっても、分娩に至るまでの経過、両親の想いに配慮し、医療者側の画一的な対応

を避け、児の症状緩和のため外科治療の選択を含め最善と思われる治療方針を家族と医療従事者が十分な話し合いの上、形成する必要がある。また今回の経験から、NICUという特殊な環境でありながらも家族が児と過ごす時間を増やすための取り組みの一つとして、NICU内の個室が果たす役割は大きいことを再認識した。

6. NICU 退院時までの母乳分泌維持に影響する要因

島根県立中央病院新生児集中治療室

中尾 泰子, 一家 由佳, 横尾 英里

早産児が入院する場合は母子分離の状態が長期間続くこと、直接授乳が開始されるまで日数がかかることから、徐々に母乳分泌量が減少していく場合が多く、正常分娩で出産した母親に比べ直接授乳開始時までに母乳分泌を継続することが難しい。A病棟での支援・児の背景的要因と母乳分泌維持の実態を明らかにすることは、今後の看護介入に有用であると考え、早産児・低出生体重児を出産した母親の母乳分泌維持に影響する要因を明らかにすることを目的として本研究を行った。

その結果、面会回数は母乳分泌維持に影響していた。そして直接授乳開始修正週数が早いほうが母乳分泌維持に有効であった。

また、退院1ヵ月後に母乳のみになった児が増えていたことから、退院時に母乳分泌が維持できていることは、退院1ヶ月後の母乳分泌維持に望みがあることを母に伝え、退院時の母乳分泌維持を目標とし精神的に支援していく必要性が分かった。

7. 三次医療を担う産科施設の退院後支援のあり方

島根県立中央病院母性病棟

長崎 瑞恵, 嘉藤 恵, 安食 星子
古田 佐保, 落合 永美

当院は島根県の総合周産期母子医療センターに指定されており、県内のハイリスク妊産婦、新生児搬送を受け入れている。平成22年度の分娩数は1031件、そのうち母体搬送は37件であった。

ハイリスク妊産婦は三次医療施設で分娩する必要がある、対象者は県内全域に渡る。ハイリスク妊婦の管理を充実させるためにも、ローリスクとなった退院後は、生活圏内となる地域での支援が必要と思われる。

当病棟では退院後の褥婦、新生児へいくつかの支援を行っている。受持ち助産師が必要と判断したケースに、電話訪問を行ったり、当院の乳房外来を紹介している。長期に継続した支援が必要と思われるケースについては、地域の開業助産師の紹介や、市町村保健師へ養育支援連

絡票を作成し、連携している。

しかし、母子が求める支援を供給するために、最も適した支援の提案をするには情報が不足している。また、私たちの指導について、評価することができていない現状がある。

当院で働く助産師としての課題は、地域に帰る母子の生活を見据えた支援を行うために、地域で活躍している助産師・保健師と、より具体的な情報を助産師会や助産師職能委員活動などを通して共有していくことである。

【特別講演】

「NICU から始める発達支援・家族支援」

地方独立行政法人長野県立病院機構

長野県立こども病院ハビリテーション科

理学療法士 木原 秀樹 先生